

社会

ボキヤ貧について

「ボキヤ貧」とは、ボキヤブラリー(語彙)の貧困な人を云うようである。日常生活の中で、何気なく交わされている言葉は、伝達手段や利便性を超えて大切な役目を果たしている。目は口ほどにものを云うという例えもあるが、決定的な意味を果たすのは言葉であることは動かせない。

近年、若者ことばの乱れが話題にのぼるが、わが国に限らずどの国の言語や言葉も時代と共に少しずつ変化して来た。特にパソコンや携帯メールが生活の一部にまでなっている今日では、言葉を縮める傾向が強くなりつつあるようだ。このネット文化の広がりを見て、一部には語彙の貧困さに繋がるのではないかと懸念する向きもあるが、他方、現在の日本はネットのお陰で未曾有の作文大国になっているという人もいる。

わが国の言語文化を担ってきた漢字は膨大な数にのぼり、読みもほとんどの字には複数の読みがあり、加えて、カタカナ、ひらがな、アルファベットが加わり、近年ではパソコンメールや携帯のツイッターなるものには、異星人が考え出したのかとさえ思える記号文字が氾濫している。そういう意味では、微妙な感情や繊細さを表現で

きる言語となっている。そのような環境と風潮の中から文字は言語を記録する手段と割り切り、最低限の情報を打ち込み、文章化はコンピュータに担当させた方が効率が良いと主張する人もいる。どちらの論も傾聴に値すると思いながら、どちらにも旗を揚げかねている。

つまるところ、日本文化を形成している核となるものが個々人であるならば、内包している語彙の少ない人ほど思考は貧困になり、文化が洗練されるはずはない。正確な意思疎通ができて、ある程度の言葉さえ操れば生活には困ることはないことも確かである。だが、我々の祖先たちが営々として育んできた言語文化はいったい何だったのであろう。日本文化は文字を持たなかった文化であると卑屈になる人もいるが、文字を持たなかったが故に、マヤ文明のように高度な天体解析のできた文明もあったし、インド国のように深い哲学を育てた国もあったのである。折角に手に入れ、わが国独自のものにさえなっている語彙を一部分でも放棄するならば、日本文化は重大な局面を迎えなければならなくなるかも知れない。文字や語彙は「思考の道具」であり、「思考そのもの」であるからである。

優れた科学者も深い思考をするには、多くの語彙と感性、情緒が

必要であり、理論だけで成り立っているように見える数学も、正しい言葉の支えなしには、真の力は付かないと多くの学者が認めている。なるほど、ノーベル賞受賞者の湯川秀樹氏や朝永振一郎氏の随筆は名文中の名文と言っても良い。人間の特質は、言葉を使って物事を考え、それを表現する動物であるという点にある。そして、それ以上に言語と語彙は歴史と文化の唯一の伝達継承手段でもある。

元来、文字を持たなかったわが国の人々にも、日本人の感性を反映した微妙な言い回しや古典に代表される情緒的な表現があり、その根源は相手の心を忖度することを基調としていた。古事記や日本書紀、もっとも素晴らしい情緒的遺産は万葉集であろう。

約千三百年前の万葉集は漢文そのままではなく、すでに、わが国独自の語法や文法を取り入れられているのである。四千五百首は長歌、短歌、旋頭歌、仏足石歌体歌、連歌が含まれているが、あづま和歌うたの一首に「多摩川に晒さらす手づくりさらさらに何ぞこの娘このここだかなしき」本文はすべて漢字が使用されているが、読みやすくするためひらがなに改めている）意味は「多摩川で手織りの布を柔かくするため、川の水で晒していると、どうしてもいいあの娘を想いだしてしまう」という恋の歌である。はるか昔、一人の青年がいと

しく想う人の面影を偲びながら作ったものと想像される。ここに千三百年の時空を越えて現代人に共通するものがあることを我々は知るのである。この純粋さは当時も今も変わらない。

美しい日本はこの心根のように「美しい言葉の国」でなければならぬと思う。国際化が進めば進むほど、自国の語彙の多彩さが求められる。新渡戸稲造にとべいなぞうという人は「武士道」という書物を書いて著名であるが、原本は日本語で書き、英訳したものだと言われている。

外国語を身につけることも大切であろうが、将来外国語で身を立てる人は、日本人の何パーセントいるのだろうか。海外旅行で片言交じりの外国語を使うより、翻訳器を持参した方が便利でお互いに誤解がなくて済むであろう。自国の歴史も文化も自国語で正確に話せない人が、国際人になることは難しい。

言葉がなくても意思疎通のできる場面が一つだけある。夫婦が五十年一緒に暮らせば、相手がお茶が欲しいのか、散歩に出たいのか、何となく分かる。これは言葉や語彙の原点なのかも知れないと思う。語彙を大切にすることとは、日常の思いやりの言葉を大切にすることに他ならない。